



# 雷 頼太郎の生涯

作:近藤せいけん

男 雷 頼太郎

戊の年号が始まった頃の話である。一人の男が今、まさに  
主の絶頂期を向かえていた。いわゆる、バブルが始まり、買った株がどんどん上がり、銀行から借  
入れた資金を元に、一棟売りのアパート、マンション、土地、ビル、を次々買ひまた、物件を転  
売し転売。また、新たな物件を買ひまた転売。東京都内に進出し、新宿駅近くの一等地に13階建  
の本社ビルを購入。資産、400億円を超えるバブル王になっていた。

3、自宅のある成城から、運転手つきの大型ベンツに乗り、服はブランド物の一流品、腕時計は2  
100万はするローレックス、靴はイタリー製、まるで歩くミスターブランドである。

41歳。名前は雷 頼太郎（かみなり 頼太郎）、今だ独身である。育ちは、両親の  
も名も知らない孤児である。中学までは施設で育ち、働きながら、夜学に通い。高校、大学を出  
て苦学人である。名の雷は浅草の雷門で拾われたため、単純につけられた名前である。気持ちは  
いたって、単純でおおらか。つまり、その、「ズボラ」なのである。

いつもの朝である。起床9時通いの家政婦が作ってくれた軽い朝食を食べ。9時30分、運転手つき  
大型ベンツに乗る。

9時30分、新宿の13階建ての本社に到着。1階ロビーにはきれいな女性秘書が、カバンもちの  
秘書課長とお出向かい。

社長！おはようございます」

お～・・・」としかこの、歩くミスターブランド社長は答えない。それが「貫禄」と思っている  
困った男である。

秘書課長が本日の予定をエレベーターに乗りながら話す。このエレベーターも社長の専用エレベ  
ーターである。

「あ、そ～」 聞いているのか、いないのかわからない。

予定があっても、毎日、コロコロ変わる困った男である。

社長室の前、この会社の専務がおで向かい。

「社長！おはようございます」

「社長、今日もきまっていますね。後光がさしていますよ！」

この専務のいつもの「よいしょ」である。

「あ、そ～」

さて、今日は月次の営業報告の日である。社長室のテーブルに、専務、営業部長、課長、経理  
課長、秘書課長が社長を中心に着席する。当月の売買実績が報告される。

営業課長「 今月は10億2,500万の利益です」

部長「 利益が上がりすぎ、税務署に睨まれそうですね、あ、はあ、あ～」

専務「 そうね、快調！快調！わが社の行くところ敵はナシ、イヒ、ヒ、ヒ」

社長 「 いいね、いいね～」

専務「 どうです、ここらで、全員で、ハワイ旅行をしませんか！」

部長「 とっても、タイムリーなご提案ですな」

課長 「 パートとやりましょう！」

専務「 いいですね、社長！ パートとやりましょう！」

社長 「 ウン～まかせる・・・」

専務 「 秘書課長！早速 手配しなさい！」

「それに、旅行のおみやげ代として、臨時ボーナスを出しましょう！」 「社長！ い  
いですね」

社長 「 ウン～まかせる・・・」

専務 「 経理課長、手配しなさい！」

「平社員には平均に、上には手厚く、いいね～いいね～」

という事で社員全員の6泊7日の「ハワイ旅行」が決まった。

雷 社長は毎月、第一日曜は必ず行く所がある。

一年半前の事である。いつものように、銀座のクラブで、お酒を飲み。この日に限って、早めに  
きりあげ、クラブのママに見をくられ、運転手つきの高級車「ベンツ」に深々と腰かけ、うつら  
、うつらして我が家に向かう、途中の出来事であった。

もう少しで、多摩川に近い所に来た時のことである。

「おおい～出島、車を止めてくれ！」

「はい、社長、どうかしましたか？」

「もようしてきた、人目のつかない所に止めてくれ！」

「はい、かしこまりました」

「社長、公園がありました」

「そこで、よい、早くしろ」

外は小雨が降っていた。季節は夏が過ぎ。秋の気配が漂っていた。公園の茂みの中で立ち、傘を  
さし、ようをたした。

車に戻ろうと、二、三、歩、歩いた。すると公園の外灯の下に小さな少年が傘をさして、一人た  
たずんでいるのが見えた。

社長は少年に近づき、やさしく声をかけた。

「こんな所で、何をしているの？」

「もう夜だよ、早く帰りなさい」

「お父さん、お母さんが心配するよ」

少年は驚いて社長を見た。そして返事をした。

「お姉ちゃんを待っているの」

「こんな所で、待ち合わせなの？」 「一人でさびしくないの」と社長は声をかけた。

「お姉ちゃんはすぐ来るの？」 「塾でも行っているの？」

少年は首をふり、黙って、社長を見つめていた。

「ぼくは何才、何年生、家はすぐ近くなの？」

「なんで、お父さん、お母さんと来ないの？」

少年が意外のことを、話した。

「僕は、一年生だよ」

「ぼくには、お父さん、お母さんはいないの」

「え～え、どうして？」

「ぼくが赤ちゃんの時、二人とも死んだの」

「だから、お父さん、お母さんを知らないの」

社長はじっと、この少年を見つめた。

「じゃ、君は、今、どこにいるの、誰と一緒になの？」

「すぐそこの、ヒマワリ園にいるの」

「ママ先生も、パパ先生、お姉さん先生も、友達もみんな親切にやさしく、してくれるよ」

「そう・・・」

「ところで、お姉ちゃんは何しに行ったの？」

「お姉ちゃんはすぐそこのパン屋さんに行っているの」

「ああ～パンを買いに行っているのね」

「う～うん・・・食パンの耳を一日おきに、もらいに行っているの」

「お店のお客さんが帰るのを待ってから、もらえるんだよ」

「食パンの耳をママ先生が、油であげてくれるの」

「とても、おいしんだよ」 「それに、パン屋のおじいちゃん、おばちゃんも、とてもやさしく

いんだよ」

「それに、帰りにお姉ちゃんと、僕にパンを一個づづくれるの」

「公園でパンを食べるの、とてもおいしいパンだよ」

「この話、内緒にしてね」

社長は自分の幼い頃「パンの耳」をもらいに行って、空腹をいやしていた、自分がよみがえっていた。

「よし～僕、お姉ちゃんを向かえに行こう」

「え、パン屋さんにか、お姉ちゃんに怒られないかなあ」

社長は、僕と手をつないで、パン屋に向かって歩いた。

「僕、名前は何かというの？」

「太陽だよ」

「何、太陽というの」

「木村 太陽だよ」

「お姉ちゃんが、明子だよ」

「おじちゃんは何？」

「かみなり いらいたろう、というの」

「わあ～すごいな、かみなり様だ」

「あすこに見える、パン屋さんかい？」

「うう・・・そうだよ」

雷 社長は太陽君の手をつないで、パン屋のガラス戸開けた。

「ごめんください！」

「あれ太陽君、どうしたの、誰と一緒になの？」

とパン屋のおばあさんが、声をかけた。姉の明子がキツイ声で

「太陽、公園で待っててね、で、いったでしょ」

「やあ、叱らんで下さい、私が頼んで連れて来てもらいました」

雷 社長はポケットから、名刺入れを出し、パン屋のおばあさんに差し出した。

「はじめまして、雷 と申します。新宿駅のそばで、不動産会社をやっています。太陽君にそのこの、公園で会って、どうしても気になって、ついてきました。」

「私も、昔、同じような境遇でした、昔の自分を見ているようです」

「貴方も、孤児でしたか・・・」

「はい、そうです、寂しい、悲しい、少年時代を送りました」

「昔の、まるで自分がいるように、思いました」

「何か口に表せない、心に感じるものが、ありました」

「まあ、まあ、どうか、御かけ下さい」

「明子ちゃん、ご挨拶をしたら」

「はい、弟がご迷惑をかけ、すいません」

「おい、おい、明子ちゃん、太陽君は何も、迷惑などかけていませんよ」

雷 社長は自分の幼い頃の話をつづけた。

「私も誰も身寄りもなく、一人で生きてきました。」

「パン屋さんでもらえる、パンの耳が唯一のご馳走でした」

「いつも「パンの耳」をいただける、パン屋さんが生きる糧でした」

「まるで、昔の私がここにいるようです」

パン屋のおばあさんが、やさしい微笑みを浮かべながら、聞いていた。  
「おばあさん、ヒマワリ園の園長先生とは、長いお付き合いですか？」  
「ええ、かれこれ、四十年になると思いますよ」  
「先代の先生からの、お付き合いなの・・・」  
「今のママ先生のお父様が、ヒマワリ園をお建てになり、二十年前ぐらいに、お父様がお亡くなるなり、後を継がれたママ先生が園長さんにおなりになった」  
「大変、長いお付き合いをさせて、いただいています」  
「大変な、ごじっこんなんですね」  
「え、え～大変、よい、お付き合いをさせて、いただいております」  
「そこで、おばあさん、ママ先生をご紹介いただけないか」  
「え、え、おやすいご用です。チョツト、お待ち下さい」  
「電話をしてみましょう。」  
パン屋のおばあさんが、ヒマワリ園のママ先生に電話をいれた。  
「パン屋の鈴木ですが、ママ先生はいらっしゃいますか」  
「ハイ、少々、お待ち下さい」  
ママ先生、ママ先生と呼ぶ声が聞こえ、しばらくすると電話口にでた。  
「ハイ、田崎でございます。ああ～鈴木さん、いつもお世話になり有難うございます」  
「明ちゃんをお使いに出していますが、おじゃましていますか？」  
「ハイ、明子ちゃんは来ていますよ」  
「実はお客様で、ママ先生にお会いしたいという人がいます」  
「この私にですか？」  
「新宿の駅近くで、不動産会社を経営している方です」  
「雷 頼太郎さんという方です」  
「あら、私に何の用かしら？」  
「近頃、来客はあまりありませんので、チョツト驚きですが・・・」  
「どうぞ、と言って下さい」  
「明ちゃんと、太陽君に早く帰るように言って下さい」  
「鈴木さん、本当にいつも有難うございます。ご主人にもどうぞ宜しく申し上げて下さい」  
パン屋の鈴木さんは、受話器を下ろした。  
「社長、どうぞいらっしゃつて、下さいと、おしやっていましたよ」  
「はい、有難うございます」  
「この子達と一諸にヒマワリ園にいきます」  
「ところで、鈴木さん、ここにあるパンとお菓子類を全部下さい」  
「え、え～いいんですか？」  
「明子ちゃん、園の生徒は何人いますか？」  
「ハイ、41名です。それに先生方が5人いらっしゃいます」  
パン屋のおばあさんは、あわてて、お菓子類、パンを大きな袋に詰め始めた。皆で丁寧に袋詰めした。  
「鈴木さん、明日も人数分パンを焼いて下さい」  
「ヒマワリ園に届けて下さい」「代金をお支払いしておきます」  
「はい、いいんですか」「それは、それは～」

「子供達もたいそう喜ぶと思いますよ」  
「さあ、明子ちゃん、太陽君、行こうか」  
「はい、僕もパンを持つよ」  
「そうだ、運転手を、忘れていた」  
社長は携帯で、運転手の出島を呼びでした。ベンツの高級車がパン屋の前に到着した。運転手が車から降りてきて、ドアを丁寧に開ける。  
「さあ、どうぞ、お嬢さん方、どうぞお乗り下さい」  
「わあ、すごいなあ、こんな車初めてだ！」  
「太陽、静かにしなさい！」  
トランクにお土産のお菓子、パンを積み込み、後部座席に深ぶかと座った。ドアを開け、太陽が大きな声でおばあさんにお礼を言う。  
「ありがとう、おばあさん！またね」  
「お世話になりました」  
車はヒマワリ園を目指して走った。  
しばらく走ると、青いトタン屋根のかなり古びた二階建ての建物が見えてきた。建物全体がかなり、いたんでおり、いたるところ継ぎ接ぎだらけの建物である。  
車が止まった。玄関に園長先生のママ先生が立って迎えた。  
「明ちゃん、太陽君、車に乗せてもらったの？」  
「うん、すごいよ！ドイツのベンツだよ、ベンツだよ」

「そう、よかったわね」

「初めまして、雷 頼太郎と申します」

「突然、おじゃまし、すいません」

「ようこそ、いらっしやませ」

「園長の田崎です。どうぞ、お入り下さい」

「失礼いたします」

雷社長は運転手にパン、お菓子の運搬をまかして、建物内に入った。室内はきれいに掃除されていたが、いたるところ傷んでおり、くすでいた。

園長室に通をされた。

「雷様、どうぞお座り下さい、雷様では、何か、おかしいですね、オホ、ホ、ホ」

「ワハ、ハ、ハ、よく言われます。でも、得をしています」

「そうでしょ、一回で、お名前は覚えますでしょう・・・」

「沢山のパンとお菓子を御寄付いただき、ありがとうございます」

「子供達もさぞかし喜ぶと思います。本当にありがとうございます」

「いいえ、いいえ。公園で太陽君に出会い、話していると自分の幼い頃を思い出し、おせっかいをやきました」

「何か、手助けしたいと、心から思いました」

雷社長はママ先生に会った瞬間から、心に響くものを強く感じた。

やっと、捜していた人生の師にめぐりあったと思った。

雷社長は幼い頃の、悲しい、つらい、過去を語った。このやさしい園長先生には何故か秘められた過去のかなしい話を、聞いてもらいたいと心の底から思った。

雷社長は続けた。

ママ先生は慈愛の満ちた笑みを浮かべ、静かに聞きいった。そして長い話をずうっと、姿勢も崩さず真剣に聞いてくれた。

話が終わると、ママ先生が口を開いた。

「頼太郎さんも、大変つらい思いをされましたね」

「でも、今、貴方は不動産業で成功をし、多くの社員、お客様に信頼と尊敬を集めています、大変素晴らしい事です」

「そして、今日、子供達の為に、おいしいパン、お菓子をプレゼントしてくれました」

「どんなに、子供達が喜ぶことか！ 貴方様の善意に、感謝いたします」

「そう、言われると、テレます。今後も園に来てもいいですか？」

「どうぞ、来てください！ 明ちゃん、太陽君も喜びます」

雷 社長とヒマワリ園の付き合いが始まった。